

離乳食・幼児食に関する研究

— 離乳食情報に関する調査 —

高橋悦二郎¹⁾，上田 玲子²⁾，菊池ふみ子¹⁾

要約

乳児の離乳期の栄養指導の充実・向上等の改善を図るために、生後5カ月～12カ月児をもつ母親を対象に、離乳食情報が母親に与える影響について調査を行った。

1. 離乳食の情報源として利用したものは、離乳の本・育児雑誌・友人・知人・育児書・乳児健康診査、役に立ったのは、友人・知人・小児科医・育児雑誌・離乳食の本・育児書の順に多かった。
2. 離乳食を与えていて困ったことがある母親は66.8%あり、その対応として相談した、本・雑誌を読んだが同じ割合で多かった。
3. 育児書は1冊、離乳食の本は0～1冊を持つ母親が多かった。育児雑誌は70.8%が購読していた。
4. 情報源による内容の食い違いの経験がある母親は19.4%で、頻度は1～2回、程度は「気になる程度でたいしたことがなかった」が多かった。
5. 食物や栄養のとり方で悩む母親が60.7%みられ、「7比¹体質かもしれない」と不安から悩むものが最も多かった。
6. 離乳食の情報をふやして欲しいと望むものが多かった。

以上の結果より離乳食の情報源として小児科医・栄養士などの専門家のあり方、育児雑誌、育児書等の活字による情報の内容、周囲の助言について検討を加えることが、必要と考えられた。

見出語：離乳食の情報源、情報源による内容の食い違い、食物や栄養に関する悩み事、離乳食の情報

研究目的

現代は情報化時代といわれ、離乳食に関しても多くの情報が存在している。この情報が乳児を持つ母親や保護者に与える影響は大きいものと考えられる。この影響を調査・研究することにより今後の離乳食の栄養指導の充実・向上に役立たせたいと考えた。

研究対象および方法

対象は東京都および埼玉県に居住する生後

5カ月～12カ月児を持つ母親である。

研究方法は質問紙により、離乳食の情報の入手方法、情報源による内容の食い違い、情報の必要性の有無をたずねる等の調査を行った。

調査期間は1991年9月～1992年2月である。

対象となる母親に対して東京都では、公的な保健相談所と民間の小児科専門の診療所、埼玉県では公的な健康管理センターと民間の小児科専門の診療所を通して質問紙を配布、回収した。回収状況は613部（回収率72.5%）

1) 女子栄養大学 小児栄養学研究室 2) 光山小児科医院

で、内訳は東京都391部（回収率66.7%）、埼玉県222部（回収率85.4%）である。

対象となった乳児の平均月齢は9.2カ月（標準偏差2.8）、性比は男1.1：女1.0であり、東京都と埼玉県での地域差はみられなかった。

母親の年齢は18～45歳で平均年齢は29.9歳（標準偏差4.2）、就業率は18.3%である。母親の学歴は高等学校卒業が36.9%と最も多く、ついで専門学校21.2%、短期大学20.3%、4年制大学17.5%、中学校3.6%、大学院0.5%の順であった。

子供の数は1人が最も多く53.8%、2人が32.5%；3人が12.1%、4人以上が1.6%であった。家族構成は核家族が最も多く、85.8%（母子家庭を0.5%を含む）であった。

本研究の解析は対数-線形モデルによった。

結果および考察

1. 情報源

表1に示したように、離乳食の知識を得るために利用した情報源は「離乳の本（単行本）」「育児雑誌」「友人・知人の話」「育児書」「乳児健康診査」の順に多かった。

利用した情報源が役にたったかどうかについては表2に示した。表1と順位が入れ代わっていることは注目される。役に立ったものは「友人・知人」「小児科医」「育児雑誌」「離乳の本」「育児書」の順である。

この結果から利用する情報源の多くは「離乳の本」「育児雑誌」等の活字によるマスコミからの情報源、身近で対等関係にある「友

人・知人」、それに受診率の高い「乳児健康診査」である。しかし役に立ったものは、活字によるものより「友人・知人」や「小児科医」が多くなっている。また保健婦、栄養士など専門家も役に立ったとする母親も多い。このことは今後情報源として専門家が、母親にいかに関わりやす場を提供するかによって栄養指導の充実・向上が図れるという示唆を与えているのではないかと考えられる。情報源として乳児健康診査を利用する母親が多いことを考えるとき、乳児健康診査のあり方と専門家の関わり方に期待してもよいのではないだろうか。

2. 離乳の進行上の問題と情報源

離乳食を与えていて困ったことがある409名（66.8%）、ない203名（33.2%）であった。その内容を表3、そしてその対応は図1・表4に示した。対応として「相談した」、「本・雑誌を読んだ」がほぼ同じ割合であった。しかし図2・表5に示したように、母親が離乳食を与えていて困った時には、本や雑誌の活字のマスコミからの情報による手助けよりも、相談相手という人間からの情報の手助けを求めていることがわかる。

手助けしてほしい相談相手の中で最も多いのは小児科医、そして栄養士といった専門家である。それらの専門家がいかに関わりやす場を手助けを求める母親に関わっていけるかが今後の課題である。しかしそれに並んで友人、知人、実母といった気兼ねない周囲の人々の助言を望んでいることも忘れてはならないであ

ろう。

3. 情報源としての活字メディア

離乳食の知識を得るために離乳食の本・育児書を利用(表1)したり、離乳食を与えていて困ったときの対応として「本・雑誌を読んだ」とする割合(図1)は高率であった。このため所持する育児書数と、離乳食の本の数の関係を表6に示した。

この結果から、育児書は1冊所持のものが多く、3冊以上所持しているものは少なかった。離乳食の本は所持していない(0冊)および1冊所持が多く、2冊以上所持のものは少ないことがわかった。また育児書と離乳食の本の両方を所持していないものや、育児書のみ所持していて離乳食の本を持っていないものが多かった。これより育児書および離乳食の本を何冊も所持している母親は少ないことがわかった。

育児書と離乳食の本に加えて育児雑誌を購読しているか否かも含めて検討した結果を表7に示した。これから育児書を所持し、育児雑誌を購読する母親は多いことがわかる。活字メディアの中では、離乳食の情報源として育児書と育児雑誌の果たす役割も大きいといえよう。

ところで育児雑誌(購読率70.8%)のなかではWとBの2誌が購読率が高く、W誌46.8%、B誌が36.0%で、2誌を合わせると82.8%と約8割を占める。他にH誌8.2%、I誌(育児テレビ番組誌)3.2%、その他5.8%であった。離乳食の知識を得るにあたってはW誌とB誌の役

割は大きいようである。

4. 情報源による内容の食い違い

情報源により離乳食に関する内容が食い違って困った経験を持つ母親は119名(19.4%)、困った経験なしが493名(80.6%)であった。

頻度および程度を図3・図4に示した。

食い違って困った内容は卵、大豆など様々な食品の与えてよい時期(26.9%)、アレルギー食の内容(26.0%)、調理法(16.8%)、離乳開始時期(16.0%)、味付け(14.3%)の順であった。

食い違った情報源は「友人・知人」と「専門家」10.7%、「友人・知人」と「育児書・育児雑誌」7.3%、「友人・知人」と「実母」5.3%、「実母」と「育児雑誌」12.8%、「実母」と「専門家」11.3%、「姑」と「専門家」14.7%、「姑」と「育児雑誌」11.3%、「専門家同士」(保健婦と医師、保健婦と栄養士、小児科医と皮膚科医)5.3%、「育児書」と「育児雑誌」8.0%、その他13.3%であった。

解決方法は「信頼できる人に相談した」39.0%、「時が解決した」38.1%、「いまだに悩んでいる」15.3%、「納得するまで情報を集めた」7.6%であり。ここでも「人」の情報源としての役割が大きい。

しかし全体的には、情報源により食い違いがあつて困った母親の割合は19.4%と2割弱であり、その頻度も1~2回、程度も気になる程度で大したことはなかったが多く、8割以上の母親は困った経験もなかった。

この結果から情報化社会の中で、母親たち

にも賢い情報選択が求められているが、離乳食の情報選択においては多くの母親はその期待に答えていると考えてもよいであろう。

ところで今回の調査で「友人・知人」や「実母」が情報源として果たす役割（表1・表2）も多いことがわかった。特に「友人・知人」は、同時代に子育てをし、問題意識に共通点も多いため、情報源としての価値が高いのであろう。また「実母」は子育てをした時代は違うが、子供を育てあげたという経験への信頼、身近で遠慮なく、ささいなことでも相談できるという点などで情報源としての価値の高さは十分推察できるものである。しかし、一方で科学的裏付けを持たない周囲の助言によって戸惑う母親が少数ではあるが存在したことも見逃せない事実であろう。このような時にこそ科学的裏付けを持った専門家の適切な助言が必要ではないだろうか。

5. 食物や栄養のとり方に関わる悩み事

食物や栄養のとり方に関わる悩み事がある372名（60.7%）、悩みなし241名（39.3%）であった。

悩み事の内容は表8に示した。悩み事は「アトピー体質かもしれない」が最も多く、「アトピー体質と診断された」の約2倍となっている。また「母乳の出や飲みが悪い、人工乳の飲みが悪い」という乳汁に関する悩みが少なくなかった。すでに離乳期に入っている子供を持つ母親も乳汁量に関心が強いことが伺える。栄養指導の内容充実のためには、より積極的に乳汁に関する内容も取り入れていく必

要があるのかもしれない。次に「体重が増えない、小食である」が「食べ過ぎ、肥満の悩み」を上回っているのはこの時期に多くみられる傾向であろう。

6. 情報量

離乳食の情報をふやして欲しいが492名（80.4%）、ふやさなくてよいが120名（19.6%）であった。ふやして欲しい情報の内容は表9に示した。

情報をふやして欲しいとする母親の因子を検討した結果が表10～13である。この他、母親の学歴、職業、家族構成、住居地域でも検討したが有意差はなかった。

これより離乳食を与えていて困った経験のある母親、食物や栄養のとり方に関わる悩み事のある母親、子供数が一人の母親は情報をふやして欲しいと望んでいることがわかった。しかし子供数4人以上の母親は情報をふやさなくてよいとしていた。

これより離乳食に関して問題をかかえたり子育ての経験がないものが、現在ある情報だけでは満足出来ずに、より多くの情報を求めていることがわかる。現在は離乳食に関してさえも情報はあふれているように見受けられる。しかしもっと情報をふやして欲しいとする母親が多い事実を見た時、様々な事を考える得なかった。もっと情報をふやして欲しいと多くの母親たちが望むのは、現在情報はたくさんあるが、それぞれ一人一人の母親びったりくる情報がないためか、それともそうした情報を集める姿勢が母親自身にないのか、

子育て中で情報を集めるのに制約があるのか等、多方面から検討して今後の課題にしていきたい。

結論

離乳食の栄養指導の充実・向上を図るために離乳食の情報が乳児を持つ母親に与える影響について調査を行った。その結果は以下である。

- 1) 離乳食の情報源として利用したものは「離乳食の本」「育児雑誌」「友人・知人」「育児書」「乳児健康診査」の順に多かった。
- 2) 離乳食の情報源として役に立ったのは、「友人・知人」「小児科医」「育児雑誌」「離乳の本」「育児書」の順で多かった。
- 3) 離乳食を与えていて困ったことがある者が66.8%あり、その対応として「相談した」「本・雑誌を読んだ」が同じ割合で多かった。しかし希望としては小児科医、栄養士、友人、実母等に「相談したい」が多かった。
- 4) 育児書は1冊、離乳食の本は持っていないか1冊持つ者が多かった。育児雑誌は70.8%が購読していた。
- 5) 情報源による内容の食い違いの「経験がある者」は19.4%で少なく、頻度も1~2回が48.7%、程度も「気になる程度でたいしたことがなかった」が82.2%であった。
- 6) 食物や栄養のとり方に関わる悩み事が60.7%の者にみられ、そのなかで「アトピー体質かもしれない」という不安から悩むものが最も多かった。

7) 離乳食の情報をふやして欲しいと望むものが、80.4%と多くかった。その因子として離乳食を与えていて困った経験のあるもの、食物や栄養のとり方に関わる悩みのあるもの、子供数が1人のものがあげられた。

以上より離乳食の栄養指導の充実・向上を図るためには、以下のことが考えられた。

離乳食の情報源として

1. 小児科医、栄養士、保健婦等の専門家の必要性
2. 育児書、育児雑誌等の活字による情報の内容の充実化
3. 周囲の助言のあり方

参考文献

- 1) 今村栄一編：離乳の基本。医歯薬出版株式会社，1981
- 2) 齊藤幸子，他：育児情報に関する研究（第1報）母親の情報収集に関する現状調査。母子保健情報，26；117-124，1989
- 3) 田中 豊，他編：パソコン統計解析ハンドブック2，多変量解析編，共立出版株式会社
- 4) 弓野憲一，他：対数-線形モデルによる質的データの解析とそのためのBASICプログラム。静岡大学教育学部研究報告，32；189-215，1981

表1 利用した情報源 (重複回答)

情報源の種類	人数 (%)
1 離乳の本	417 (68.0)
2 育児雑誌	413 (67.4)
3 友人・知人	410 (66.9)
4 育児書	380 (62.0)
5 乳児健康診査	360 (58.7)
6 実母	312 (50.9)
7 テレビ番組	285 (46.5)
8 育児学級・講座	273 (44.5)
9 小児科医	241 (39.3)
10 保健婦	230 (37.5)
11 育児相談	221 (36.1)
12 栄養士	221 (36.1)
13 離乳食の雑誌・ムック	209 (34.1)
14 姑	206 (33.6)
15 姉妹	187 (30.5)
16 産婦人科医	144 (24.5)
17 夫	140 (22.8)
18 新聞	139 (22.7)
19 看護婦	132 (21.5)
20 ラジオ番組	100 (16.3)
21 ビデオ教材	98 (16.0)
22 電話育児相談	92 (15.0)
23 その他	17 (2.8)

表2 役に立った情報源 (%)

情報源の種類	役に立った割合
1 友人・知人	90.2
2 小児科医	85.5
3 育児雑誌	85.2
4 離乳の本	83.7
5 育児書	80.5
6 実母	79.5
7 乳児健康診査	75.3
8 保健婦	75.2
9 栄養士	75.1
10 テレビ番組	74.1
11 育児相談	70.1
12 姉妹	69.5
13 育児学級・講座	65.2
14 離乳食の雑誌・ムック	64.1
15 姑	60.2
16 看護婦	53.0
17 産婦人科医	51.4
18 夫	34.3
19 新聞	23.7
20 電話育児相談	21.7
21 ビデオ教材	15.3
22 ラジオ番組	11.0
23 その他	2.8

表3 離乳食を与えていて困った内容 (重複回答)

内容の種類	例数	%
1 献立	176	13.9
2 栄養バランス	154	12.1
3 遊び食べ	143	11.3
4 口から出す	92	7.2
5 分量がわからない	87	6.9
6 病気の時	82	6.5
7 食べない	82	6.5
8 調理法	76	6.0
9 かまない	75	5.9
10 食品の種類	74	5.8
11 むらぐい	71	5.6
12 小食	52	4.1
13 食物アレルギー	37	2.9
14 偏食	31	2.4
15 大食	26	2.0
16 その他	11	0.9
計	1269	100.0

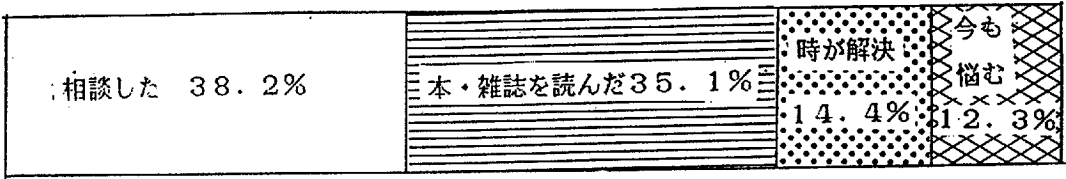


図1 離乳食進行上の問題の対応

重複回答 N=652

表4 困った時の相談相手

(重複回答)

相談相手	例数	%
1 友人	100	19.5
2 実母	100	19.5
3 小児科医	74	14.4
4 近所の知人	63	12.3
5 姉妹	41	8.0
6 栄養士	35	6.8
7 保健婦	25	4.9
8 夫	22	4.3
9 姑	21	4.1
10 保母	13	2.5
11 電話育児相談	9	1.8
12 看護婦	4	0.8
13 その他	6	1.2
計	513	100.0

表5 困った時に望む相談相手

(重複回答)

相談相手	例数	%
1 小児科医	189	22.6
2 栄養士	129	15.4
3 友人	107	12.8
4 実母	91	10.9
5 保健婦	89	10.6
6 近所の知人	84	10.1
7 電話育児相談	44	5.3
8 姉妹	31	3.7
9 姑	31	3.7
10 夫	20	2.4
11 保母	15	1.8
12 看護婦	6	0.7
計	836	100.0

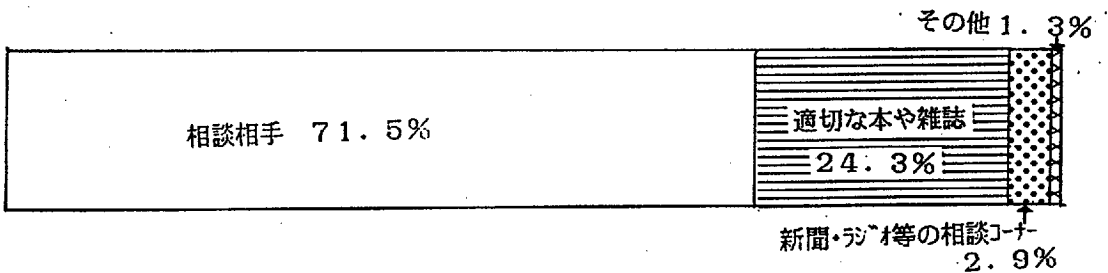


図2 離乳食進行上の問題に望まれる対応

重複回答 N=522

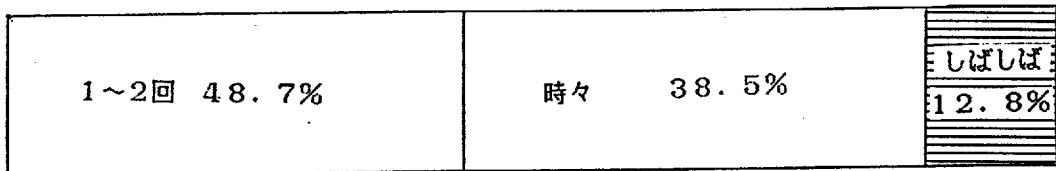
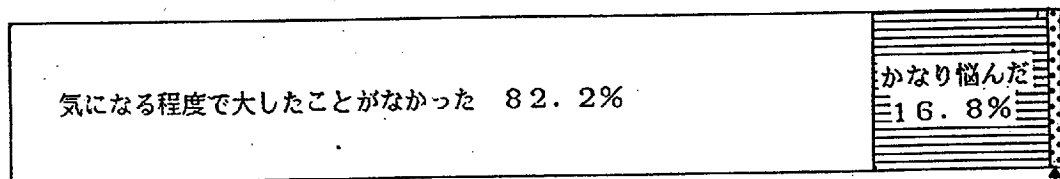


図3 情報源による内容の食い違いの頻度

N=117



ノイローゼ状態 1.7%

図4 情報源による内容の食い違い程度

N=118

表9 今後望まれる離乳食情報 (重複回答)

種類	例数	%
1 献立例	213	12.4
2 調理法	200	11.7
3 食品の知識	185	10.8
4 病気の時の離乳食	147	8.6
5 かむ力をつける方法	127	7.4
6 栄養のとり方	123	7.2
7 与える分量	121	7.1
8 遊び食べ対策	109	6.4
9 おやつとの与え方	103	6.0
10 味付け	83	4.8
11 全体の流れ	69	4.0
12 アレルギー食	56	3.3
13 小食対策	48	2.8
14 食べ過ぎ対策	39	2.3
15 むら食い対策	39	2.3
16 偏食対策	38	2.2
17 その他	13	0.8
計	1713	100.0

表6 育児書数と離乳食の本の数との関係

離乳食の本の数 育児書数	離乳食の本の数				計
	0冊	1冊	2冊	3冊以上	
0冊	83 3.071**	43 -0.993	14 -0.365	7 -0.790	147 0.203
1冊	123 3.071**	93 1.623	19 -1.109	9 -1.644	244 4.646**
2冊	55 -0.967	60 0.501	16 -0.350	11 0.585	142 1.513
3冊以上	15 -3.533**	23 -0.730	11 1.549	7 1.746+	56 -5.168**
計	276 9.733**	219 8.686**	60 -4.312**	34 -7.599**	589

注1. 上段は実数値(単位は人数)である。なお実数値は無回答を除くものとした。
以下同様である。

注2. 下段は標準値である。

モデル推定有意水準 $\alpha = 1.96$

* 5%の危険率をもって有意である。

** 1%の危険率をもって有意である。

+ 10%の危険率をもって傾向がある。

N. S 5%の危険率をもって有意でない。

以下同様である。

表8 食物や栄養のとり方に関わる悩み事(重複回答)

表7 育児書、離乳食の本と育児雑誌の購読状況

種類 購読状況	育児書	離乳食の本	育児雑誌	計
購読している	464 5.715**	325 -8.579**	433 2.303*	1222 14.143**
購読していない	147 -5.715**	286 8.579**	178 -2.303*	611 -14.143**
計	611	611	611	1833

内容	例数	%
1 7t ⁺ -体質かも	89	16.9
2 母乳の量	73	13.9
3 哺乳量-人工乳	62	11.8
4 体重増加量	61	11.5
5 小食	48	9.1
6 7t ⁺ -体質	46	8.8
7 食べ過ぎ	35	6.7
8 肥満	31	5.8
9 湿疹	26	4.9
10 病気がち	25	4.8
11 その他	30	5.7
計	526	100.0

表10 離乳食進行上の問題と情報量

離乳食進行上の問題 情報量	問題がある	問題がない	計
ふやして欲しい	344 3.253**	65 -3.253**	409 4.860**
ふやさなくてよい	148 -3.253**	55 3.253**	203 -4.860**
計	492 12.755**	120 -12.755**	612

表11 情報源による内容の食い違いと情報量

食い違いの経験 情報量	経験がある	経験がない	計
ふやして欲しい	101 1.366	391 -1.366	492 11.070**
ふやさなくてよい	18 -1.366	102 1.366	120 -11.070**
計	119 -11.070**	493 11.070**	612

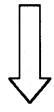
(N . S)

表12 食物や栄養のとり方にかかわる悩み事と情報量

悩み事 情報量	悩みがない	悩みがある	計
ふやして欲しい	175 -1.982*	217 1.982*	392 11.281**
ふやさなくてよい	66 1.982*	54 -1.982*	120 -11.281**
計	241 -0.069	271 0.069	512

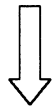
表13 子ども数と情報量

子どもの数(人) 情報量	1	2	3	4以上	計
ふやして欲しい	278 3.373**	155 1.253	54 0.024	5 -2.047*	492 5.471**
ふやさなくてよい	51 -3.373**	44 -1.253	20 -0.024	5 2.047*	120 -5.471**
計	329 11.477**	199 7.737**	74 -0.630	10 -8.147**	612



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約

乳児の離乳期の栄養指導の充実・向上等の改善を図るために、生後5ヵ月～12ヵ月児をもつ母親を対象に、離乳食情報が母親に与える影響について調査を行った。

1. 離乳食の情報源として利用したものは、離乳の本・育児雑誌・友人・知人・育児書・乳児健康診査、役に立ったのは、友人・知人・小児科医・育児雑誌・離乳食の本・育児書の順に多かった。
2. 離乳食を与えていて困ったことがある母親は66.8%あり、その対応として相談した、本・雑誌を読んだが同じ割合で多かった。
3. 育児書は1冊、離乳食の本は0～1冊を持つ母親が多かった。育児雑誌は70.8%が購読していた。
4. 情報源による内容の食い違いの経験がある母親は19.4%で、頻度は1～2回、程度は「気になる程度でたいしたことがなかった」が多かった。
5. 食物や栄養のとり方で悩む母親が60.7%案みられ、「アトピー体質かもしれない」と不安から悩むものが最も多かった。
6. 離乳食の情報をふやして欲しいと望むものが多かった。以上の結果より離乳食の情報源として小児科医・栄養士などの専門家のあり方、育児雑誌、育児書等の活字による情報の内容、周囲の助言について検討を加えることが、必要と考えられた。